

聖書：創世記 1：6～31

説教題：人間の創造

日時：2019年6月23日（夕拝）

前回は天地創造における第一日目のみわざについて見ました。今夕は第2～6日目までを一気に見て行きます。この天地創造の記事は6日目の人間の創造においてクライマックスに達するように書かれています。まず創造の第2日目のみわざが6～8節に記されています。そこで行われたことは大空と水との区別でした。水は「上の水」と「下の水」とに区別されました。下の水とは今日の海や川など、まさに私たちの下にある水のことだろうと想像が付きませんが、上の水とは一体何でしょうか。具体的には雨のことを思い浮かべれば良いと思います。時々どしゃ降りの雨が降ることもあります。その落ちてきた水を全部集めたら、どれくらいの量と重さになるでしょう。あれだけの水が、重いものを少しも支えることができないような大気の上にそれまであったことを覚える時、確かに「下の水」と「上の水」とがあることが分かって来ます。神は水を上と下とに分け、その間に大空という空間を割り込ませることによって、人間が生活するための適切な環境を備えられたのです。

3日目は9節以降の陸の出現です。乾いた地は、言うまでもなく人間の生活に必要です。ヨブ記38章9～11節：「海が噴き出て、胎内から流れ出たとき、だれが戸でこれを閉じ込めたのか。そのとき、わたしは雲をその衣とし、暗黒をその産衣とした。わたしは、これを区切って境を定め、かんぬきと戸を設けて、言った。『ここまでは来てよい。しかし、これ以上はいけない。おまえの高ぶる波はここでとどまれ』と。」神はこうして人間を飲み尽くそうとする水の力に制限を加え、人間が住める陸地を確保されました。具体的には大地の隆起とか海底の沈没などが生じたのでしょう。そして陸が出現するや否や神は植物を生じさせられました。神が命じた御言葉によってそのようになったのです。

天地創造の4日目からは最初の3日間との間に対応関係が見られます。すなわち1日目に「光」が造られましたが、4日目にはそれに対応するかのよう「光るもの」が天体に置かれます。2日目には大空と水が分けられましたが、5日目にはその大空と水に住む「生き物」が創造されます。3日目には陸が出現して、そこに植物が生じましたが、6日目にはその陸に住む「動物」と「人間」が創造されます。このようなことに、天地

創造は無計画に行われたものではないこと、神は混乱の神ではなく秩序の神であることが示されています。

その4日目のみわざは太陽、月、星などに関係します。なぜそのような言葉ではっきり表現されていないのかとある人は思うかもしれません。古代世界では、多くの民族が太陽、月、星を神としてあがめました。そういう考え方と区別するため、あえてその固有名詞を避けたのではないかと考えられます。それらも神によって造られた被造物に過ぎないのです。その太陽、月、星は、この時から今日のような運行を始めたと考えられます。このことから創造の一日目から三日目までの一日は、今日私たちが考える24時間とはおそらく一致しないだろうということが推測されます（ヘブル語の「日」という言葉は、かなりの長期間を指すためにも使われます）。太陽、月、星がこの時から現在のような役割を果たすことによって、この世界には規則的なリズムが刻まれるようになりました。これによって季節が測れるようになり、年を数えることが可能になり、カレンダーを作ることができるようになりました。これによって人類の知的活動がどれほど刺激され、促進されることになったか計り知れません。

こうしていよいよ命ある動物の創造へと至ります。5日目は2日目に対応して、水と大空に住む生き物が創造されます。3日目の植物の場合もそうでしたが、ここでも動物は「種類ごとに」創造されました。進化論では人間とサルは共通の祖先を持ち、その他、様々な動物も祖先をたどって行くと言われますが、そこには連続性があると教えますが、それとは全く対立します。神は種類ごとに創造されたのです。

そして6日目には3日目に対応して、陸上に住む動物が造られました。こちらも「種類ごとに」です。これら造られたものについて創世記は繰り返して「神はそれを良しと見られた」と語っています。いずれも神の素晴らしい作品であり、造られたものの内には、それを造った神ご自身の良さ、卓越さが刻印されていました。それら一つ一つは、この世界を創造された神をほめたたえるものでした。そうして最後に人間の創造が記されます。この人間の創造はこれまでとは違った雰囲気、特別な仕方、特別な仕方で記述されています。

まず26節に「さあ、人を、～のように造ろう！」という神の言葉があります。これまではこんな神の言葉はありませんでした。これはいよいよ重大なわざに着手しようと

する時の言葉のようです。まるで芸術家が最後の大事な仕事に取りかかる時の、喜びに満ちた、それでいて緊迫感のある特別の態度というものがここに記されています。

そして神は「人をわれわれのかたちとして、われわれの似姿に造ろう」と言われます。この「神のかたち」という表現も他の被造物には言われていないものです。先にも触れたように、この世界で造られたものすべてには、これを造った神のご性質が刻み込まれています。ローマ人への手紙 1 章 20 節：「神の、目に見えない性質、すなわち神の永遠の力と神性は、世界が創造されたときから被造物を通して知られ、はっきりと認められる」 それらの作品には、その作者なる神が何らかのレベルで刻印されています。しかし人間は特別な仕方ですとされています。

ではこの神のかたちとは何でしょうか。この言葉は「彫刻する」とか「切る」という意味を持つ言葉です。そういう意味で人間は神を写し取ったものと言えます。しかし聖書に神は「霊」と言われています。ですからこの意味は、神にも私たちと同じような顔や手や足があるということではありません。この神のかたちと訳されている言葉は英語ではイメージという言葉に対応します。すなわち人間は神のイメージなのです。もちろん人間は神ではありません。ここに「似姿」という表現もあります。似ているけれども同じではない。神と私たちの間には創造者と被造物という点からして絶対的区別があります。にもかかわらず「似ている」と言われています。神を鏡で映し出すような存在だということです。

それは特にどんな点でしょうか。これを考える上で注意すべきは、聖書は人間のある部分が神のかたちであるとは言っていないことです。色々な人が人間の色々な点を、これが神のかたちの意味ではないかと提案しますが、まるで人間には神のかたちに相当する部分とそうでない部分とがあるかのように考えるべきではないと思います。人間の存在丸ごとが神のかたちと言われています。そのことを押さえた上で参考になるのはウェストミンスター小教理問答問 4 の「神とは、どんな方ですか」に対する答えです。そこに「神は霊であられ、その存在、知恵、力、聖、義、善、真実において無限、永遠、不変の方です」と答えられています。日本語訳で最後に出て来る「無限、永遠、不変」は神にのみ当てはまる特有な性質と言えますが、その前に出て来る「知恵、力、聖、義、善、真実」などは私たちにも当てはまることではないでしょうか。私たちはまさにこれらの点で神を映し出す存在として造られていると言えます。無限、永遠、不変ではない

けれども、神を表現する際に用いられている知恵、力、聖、義、善、真実を鏡で映し出すように持ち合わせている者として造られている。男も女もそうです。

そして神のかたちとして私たちが造られていることは、28節の人間の使命とセットで考えられる必要があります。神は仰せられました。「生めよ。増えよ。地に満ちよ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地の上を這うすべての生き物を支配せよ。」この世界を真に治めておられるのは神です。しかし私たち人間は神のかたちとして造られた者として、神の代表、神の代理者として、神がこの世界を治めるように治めるのです。最初に造られた人間には罪がありませんでしたが、分からないことはたくさんあったでしょう。神が造られたこの世界を眺め、そこにある一つ一つの被造物を見ながら神の知恵の素晴らしさを発見し、驚嘆し、学んで行くプロセスが必要だったでしょう。また神との生ける交わりを通して、どのようにこの世界を治め、用いて行くべきか、学ぶプロセスも必要だったでしょう。そうしてこの世界を知恵をもって造られた神にすべての栄光をささげ、神の御名が賛美される、そのようないわば「文化」を形成して行くようにという使命をここで与えられたのです。

29～30節には人間の生活のために神が食べ物を備えてくださったことが記されています。古代メソポタミアの創造神話(シュメール神話)では、神々が自分たちに食べ物を備えさせるために人間を造ったとなっていますが、聖書は反対です。神が人間のために食べ物を与え、養ってくださるのです。聖書の神はそういう神です。

最後の31節には、「神はご自分が造ったすべてのものを見られた。見よ、それは非常に良かった。」と記されています。これまで神が造られたものは一つ一つ「良し」と確認されて来ましたが、ついに被造物の冠である人間の創造がなされたからでもあるでしょう。そこにある世界は「非常に良かった」と言われています。他の誰でもない、聖なる神の目から見てそうだったのですから、本当に最高の状態が、造られた最初の世界にはあったのです。

この最後の節を読む時に思われることは、今日の世界はこの状態から大きくかけ離れているということではないでしょうか。今でもこの世界を眺めて、その被造物の一つ一つを良く観察する時、また人間を見る時、そこに良い点、美しい点を見出すことができます。しかし「非常に良い」という一言でまとめることができるような世界ではない

ことを誰もが思うのではないのでしょうか。なぜそのように変わってしまったのでしょうか。それはこのあと記される人間の罪によることです。しかし聖書を続けて読む時に分かることは、だからと言ってこの創世記1章の素晴らしい世界は永遠に失われたのではないということです。私たち人間に関しても、神のかたちとして造られた私たちは大いに傷つき、今や神を映し出しているとはとても言えない状態に落ちています。最初の栄光は大いに失われています。しかし聖書はこの栄光を取り戻していけると語っています。本来の状態へ回復して行くことができる。神のかたちとして造られた私たちは、神が与える救い主によって、いよいよ神に似る者となるという本来のコースに立ち戻って行くことができる。そしてそれとセットになっているのは、この世界を神が治めるように治める者となることです。神のかたちである者として、神の代理者として、御心にかなうように、この世界を管理し、治めて行く。その宇宙大の使命も変わらずに私たちの前に置かれています。私たちは一人で全部、大きなことができるわけではありませんが、それぞれの置かれた場で神が喜ぶように生活し、神の栄光を現すために生きるのです。この世界全体が、これを素晴らしいものとして造り、今日も支えている神を賛美し、この方にすべての栄光を帰すものとなるように、その一部としての役割を果たして行く。神はその御心を変わずに持っていてくださいますし、そこに向かって私たちを救いに導いてくださいます。このビジョンを創世記1章はいつも私たちに示し続けているのです。